

初体験の僕が巨乳美女ヒーローと膣内射精セックス♥

僕だけの  
セクシーヒーロー



「ウチは周りの家からも少し離れてるし、この辺はひと気も少ないですから。ど、どうぞ。両親も今日は帰らないので…だ、大丈夫ですよ」

（ふん、何が大丈夫なんだか。でも人目に付かないなら力づくで…ああ、でも変な噂を流されたらマズイ。ああもう！今はイメージが一番大事な時期だったのに。なんでこんなガキに、私が……）

（ああ…ミレディが目の前に。綺麗だし、良い匂いだなあ。それに近くで見るとスーツ凄い…胸もお尻も…丸見え…！）



(セックスさせてくれだなんて、んなこと私がするかってのよ。  
はあ………つたく、適当に相手してやれば  
そのうち勝手に射精しちゃうわよね、ガキだし。  
それまでの辛抱だわ……)

(お尻……テレビで下から見上げてたあの大きなお尻があ。  
むっちりしてるし、あの割れ目の奥には女の人の大事な場所がある……。  
触りたい……いやもう触っちゃえばいいんだ。  
手を伸ばせばもう届く場所にあるんだから！)

「ツ!? なっ……ええ!?!」

「うはあ。スーツがすべすべで、柔らかかい」



「ちよ…ちよつとあんた!? いきなり何してんのよ! 手を…放しなさいッ!」

「い、いいじゃないですか触るぐらい。これから…セックスするんだからあ」

「それはっ…そう、かもだけど! モノには順序ってものがあるでしょ!? いいから放して! でないと無理矢理……んッ!」

(こいつ意外と力が強い!? あッ、指をアソコまでッ?)

うん?! い、弄るなこのエログキ…!!)

(ここが女の人の……!! い、挿入れるのだこだ…ここ? ここですか!?)

「ご、ごめんなさい…！ 僕興奮して我を忘れちゃって。

あの、ここが客間ですのぞ」

「ふう……ん。良い部屋ね。

この家も大きいし、もしかしてあんたボンボン？」

「いえいえっ…そんなことないです！

家は大きいかもですけど古いだけで……っ」

「そう」

「は、はい…」

「……で？」

「え…？」

「……セックスするんでしょう？ まず何したいの？」

ああ、さつきみたいないきなりのは無しよ」

「あ、はいっ。じゃあ、まず…胸を……おっぱい触らせてください…！」

「はあ……いいわよ。でも乱暴なことしたら  
そこで終わりだからね……ほら、好きに触りなさい」

「はいっ……!」

(ああ凄い……スーツがびっちり張り付いておっぱいの形が丸見えだあ。  
これがマゴレデイのおっぱい……! 触るぞ、触っちゃうぞお……!!)

「んツ……!」

「うはああ!? や、柔らかい……」

(もう……何やってんだか私は。

こんな……に胸触らせるなんて)

「こんな感触初めてだあ……指が吸い付くみたいに離れない。  
このままずっと触ってたいですっ」

「はいはい……好きにすれば?」

「スーツの手触りも最高。おほあ：たゆんたゆんですねえ」

（んツ：ああもう、何なのよその撫でまわすみたいなの触り方は…ツ。胸全体がくすぐったくて…なんかじれったいッ

うん!? あ、ヤバイ…：乳首ツ）

「あ、あのM.L.レディ？」

「やっぱりこのスーツの下って何も着てないんですか？」

「……着てないわよ。だから何？」

「凄いです、乳首の形までバッチリですよ？」

「そツ：そう…：あッ♡

こ、こらツ：そこは、んんツ!?

乳首はダメだってば…！んあッ♡」



「テレビの映像の中でブルンブルン揺れていた  
あのおっぱいが…今、僕の手の中に……！」

（触り方がだんだん大胆に……ていうかこれもう完全に揉まれてる。  
ああでも、こいつ揉み方が上手いっていうか  
揉まれるたび胸が温かくなる……？）

「おっぱい揉むのがこんなにも気持ち良いだなんて  
これ、病みつきになっちゃいますう」

「んツ…はあ…いいから、黙って揉んでなさいよ」

「この重みも最高お……！」

「マ+レデイのおっぱいもう僕だけのモノだあ」





「ちよつと…バカっ。  
いくらなんでも乱暴に揉みすぎだつてば…くうん!?  
もう少し、優しく…!」

「す、すみませんマレデイ! 僕もう少しの我慢も出来ません…!!  
ああ…っ、乳首がどんどんぶっくりして…い、いただきますっ!」

「あんツ♥ 乳首…や!? くう…ん♥ 吸わないで…ダメっ」

「ぶはあ…!! 美味しいですっ、マレデイの乳首い…もつと、もつとお!!」

（乳首は、もちろん感じるところだけど…どうして? いつもより気持ち良い）

「ふはあ…はあ、はあ…:どうでしたかミレディ？  
乳首気持ち良かったですか？」

(ガキでも…わかるでしょう？)

胸だけでこんなに声出しちゃったの…:初めてよ)

「僕…もっと良くしてあげたいです…!!  
もうここ、いいですよね？」

「え？ あッ!? いやっ…!!

や、やめなさいッ…:そんなとこ舐めちゃ…:くうんんッ♥」

(こお…の! うそ…:なんで

こんな…:一人を押しつけられないの!? もう…!!!)

(これが女の人のっ

ミレディの一番大切な所…:とても、熱い)

(ああ凄い…私のアソコいつに食べられちゃってるみたい。  
スーツ越しなのにこんな必死になって  
むしゃぼりついて…ほんとエロガキなんだから)

「うはあ…ここも、美味しいです…!  
お、オマ○コも美味しい…!!」

(スーツの中がヌルヌルになってるの分かる。  
これが愛液…濡れてるんだ、こんなに感じてくれてる!!)

「きゃうんツ…!？」

ま、待って…吸いすぎだつてば…あん♥

このスーツは特別製で…んっくう!?  
す、水分が…染み出したりしないの…!!」

「おお…!? 凄いです！」

スーツがオマ○コの形にぴったりと張り付いてる。こ、こうなってるんだあ……。

凄いや…これがマ○レデイのオマ○コ……」

「い、いやっ…見ないで!!」

(いつものスーツのまま

アソコをジロジロ見られてるなんて。裸よりも恥ずかしい……!)

(この、丸くて膨らんでるのがもしかして……)

「ツ!? ま、待ってそこは……ひうツ

んツ♥んあ、やああツ♥」

(やめて、そこは…感じすぎちゃうツ♥)

「ひいうツ!? あ、ダメっ……」

イツちゃ……んあああツ♥」

「あ、あの…っ、M.T.レディ……!!  
そろそろ僕も、して欲しいです…」

「はあ、はあ…はあ…んツ。いいわ…ありがたく思いなさいよ」

(なんだかんだで私、こいつに押されっぱなし…。  
主導権を握らないと…)

「うはああ…M.T.レディが僕のを啜えてるう……。  
し、信じられないよお…」

(もう、なんなのよこれ太すぎ。こいつホントに■学生なの？  
生意気よ…こんな、立派なの)

「うあっ!? うはあ…!? 気持ち、良すぎいい……!!」

(ん……ッ、でも凄いビクビクしてる。

初めてじゃ…我慢なんてできないでしょ?

ほら、さっさと射精しちやいなさい…!!

それでこんなのはお終いよ)



「くうあ…!? いいよっ…いいよおM.L.レディ〜。  
もっとお、もっとしゃぶってえ…!」

(…つとに、ずうずうしいガキなんだから。

いいわ、これでどうよ……!!  
射精ちやいそうでしょ……!!  
強がってないで…射精しなさい……ッ!)

(はああ……凄い、あのM.L.レディが  
僕のに必死にしゃぶりついて…妄想が現実……!)

(な、なんか変……こんな太すぎて苦しいだけなのに。  
私、夢中になってる…?  
あんたが早く射精さないからよ……もう…ッ)

「ああ、そこお…そこですう〜。  
うへあ…上手ですよおM.L.レディ〜」

「ツ…ぷはあ……!!」

はあ、はあ……く、口はもう終わりよ……!!」

「そ、そんなあ……!? 僕、もっと……」

「ええ……だから大サービスよツ。

胸、好きなんでしょ……? 挟んであげるわ……!!」

「あツ……うはあ!? こ、これってパイズリ……!!?

すご……おお……おっぱいがあ、僕のを包んで……!!」

「ほら、どう……? 気持ち良いでしょう……!?

この格好でこんなことするの

初めてなんだからね……喜びなさい……!!」

「は、はい……!!」



(ミレディにパイズリまでしてもらえるなんて……。これ、一生の思い出だよお。

ああ……。それにしても、こんな順調にいくなんて……)

「んっもう……。ここまでしてあげてるのになんで射精さないの……。!? もっとギュツとした方が良い……?」

うんっ……。んッ、ん! ほら、ほらッ……。射精しなさい、射精していいのよ……。!?」

「はいっ、はい……。! で、でももうちょつと……。楽しみたいから……。うああ……。!?」

(まだ、射精しませんよミレディ……。射精するのは絶対……。貴女の膈内に……。!)

(やだ……。胸に熱が伝わって……。んッ♡ 身体の奥まで熱く……。!?)



「僕…もう挿入りたいです。僕のこれ…マコ・レディの膣内に……!!」

「ダメ……やっぱそれだけはいくら何でも……」

「お願い……します……!!」

「あ……ん……はあ……♡わ、わかったわ……」

「ちよつと後ろ向いてて、スーツ脱ぐから」

「で、手伝います……っ」

「スーツの構造は秘密なの……いいから待ってて」

「は、裸……! 裸のマコ・レディだ……!!」

「ぜんぶ丸見え……女の人の身体……っ。」

「顔……す、素顔もちゃんと見せてください……!!」

「い、いや……ッ」

「(私ってば、なんでマスクまで取っちゃったのよ。」

「素顔はマズイってば……)」

「ほら、挿入したいんでしよう……!?!」

「ひっさと、しなさいよ……ッ」



「う、うわっ…これが、生のオマ○コ…！濡れて、光ってる…き、綺麗な色…っ」

「いちいち口に出さないで…！！」

（ああでも、自分でも信じられないくらい濡れちゃってる。

こんな子供の愛撫で…）

「じゃ、じゃあもう挿入れますから…！！挿入れちゃいますよ…！！」

「ひいうツ…!?」

（な、なんなの!?

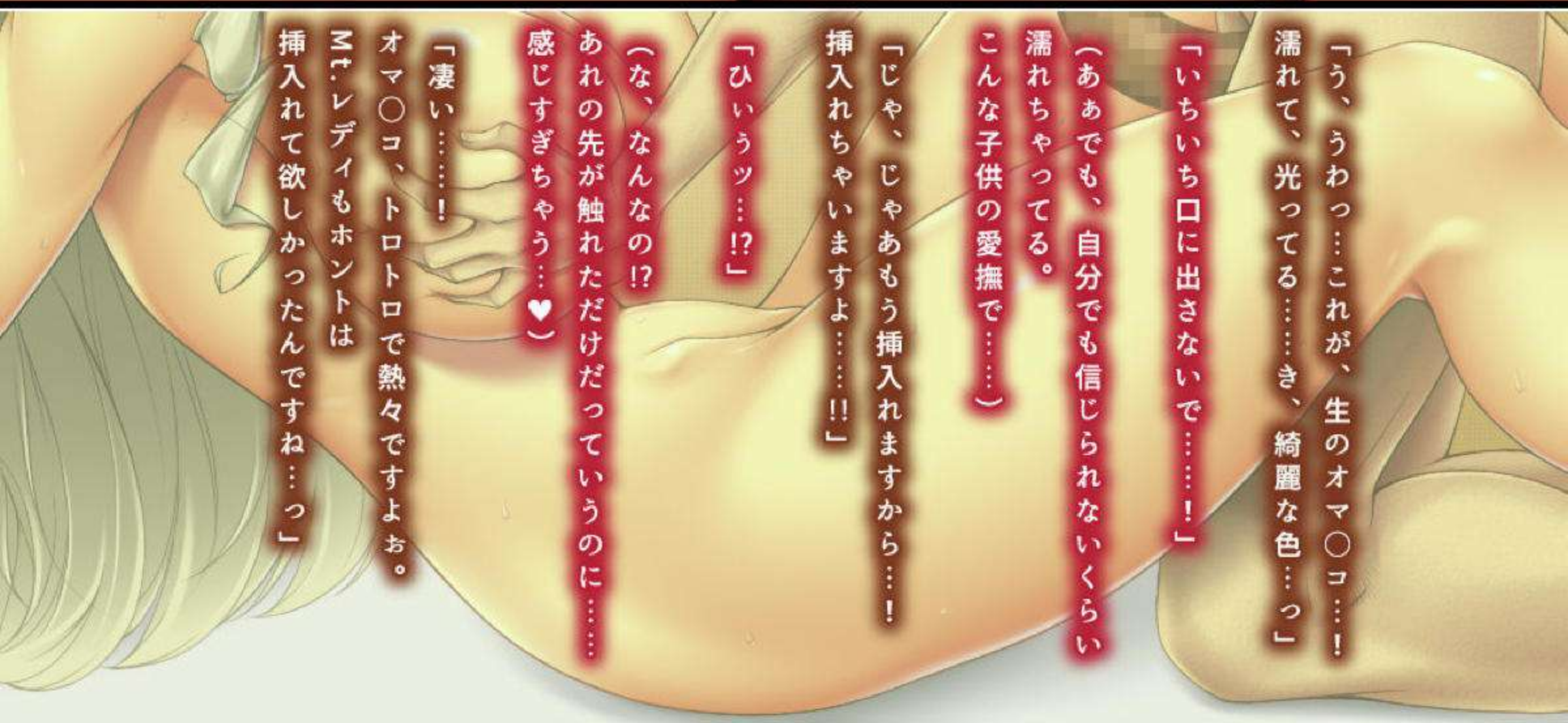
あれの先が触れたただけだっていうのに…感じすぎちゃう…♡）

「凄い…！！」

オマ○コ、トロトロで熱々ですよお。

マ○レデイもホントは

挿入れて欲しかったんですね…っ」



（んなわけないでしょうが…！ あん♡

こ、こいつの熱さと硬さが直接伝わって…やだあ…）

「こ、ここ…ですよね、入り口…！」

挿入れるんだ…マレデイの膣内に…僕のを。

あ、あれ…上手く、挿入らない…っ。

もうちよつと…なのに…！！」



（改めて見ると…こいつのやっぱり太すぎ…  
こんなの挿入れられたら…私ッ）

「……ったくもう。」

ほら、まずは先端をしっかりとはめるの…そうよ。

後は滑らないように…うんッ♡

ゆっくり、ゆっくり…ッ」



「挿入るっ…挿入ってくう！」

くうあ…なんて狭いんだ……！！

はあ…でも、もう少して頭が全部挿入る……！！

「ツ!? んあツ…♡ 太すぎい……!!」

あ、はあ…やツ♡ んツ…うんんツ……!!」

「さ、先っぽ全部挿入りましたよ……！！

マ+レディっ…うほおああ……!!」

(これ…凄すぎる！

女の人の膣内が

こんなに気持ち良いものだったなんて……！！

気を抜いたら今すぐ射精ちやうかも……っ。

くう！ 集中だ!!

これまでのイメージトレーニングを無駄にするな……!!)



「あッ、ああッ♡だっめええ……!?!」

（何なのよ、これ…!? 太くて硬くて…熱いのがあ♡  
奥まで…一番、奥まで来ちゃう…!?!）

「やっ…いやッ!? んつくううああああ…♡」

「は、挿入ったああ…!!  
根元まで挿入り、ましたあ…うはああ…あったかい」

（ウソ…こんな奥まで  
挿入られちゃうなんて初めて♡  
なんでこんな…のがお腹のナカいっばい…!?!）

「ミ…レディとつながれたあ…!!  
はあ、はああ! か、感激だあ…!!」



「あッ…うあっ、ああッ…ヤン♥あっ、んああッ…♥」

（す、凄い…激しいッ!?

このコ、挿入れるだけで精一杯な感じだったくせに…ッ。  
なんて堂々とした腰使いなの…♥）

「M.L.レディの膈内…っ

うねって僕のに絡みついできますう…ぎっちぎちだあ…!!  
僕っ…こようやって後ろからするのが夢で…!

「M.L.レディも気持ち良いですか!? 良いですよね…!?!」

「んッ♥ あッ…!?! はあん♥ い…良いわよ…あんッ♥  
でもっ…んああッ!?! ダメえ…♥」

（私だって…そんな経験豊富ってわけじゃないけど…  
こんな凄いの初めてよ…ッ♥）

「よ、良かった…! ならっ、もつと…もつとお…!!」

（挿入れた瞬間から力がみなぎってる…これも僕の…!!  
くうあ! 腰が、止まらない…!!）

(まだ■学生だったのに…なんでこんな力強く…ツ  
私されるがままにい…ツ♡)

「あッはあん…♡ ふ、深すぎるのお……んっくうん♡  
お、奥そんなに…グリグリされたらツ!?」

(ミチレデイのお尻が僕の腰の上でプルプル震えてる。  
エロ過ぎて…たまらないよお……!)

「ふうああッ!? ま、待って……ツ。

もう…少し優しく、くうん♡ ダメダメ…ダメえ…♡」



（お腹の奥があ、子宮が熱い……。

このままじゃ、すぐにイカされちゃう……ツ♡

ツ!? そういえば私、なんで生挿入を許して……!?)

「ホントにダメなんですかあ……? はっ……うはあ……っ。

腰が、くねくね動き始めてるのに」

「うっ……ウソ!? ああ、そんな……なんで♡

やっ……んんツ♡ ダメなのに……!?!? んああツ♡」

（イヤなはずなのに、気持ち良すぎて我慢できない……♡）





「あツ♥んあツ…♥んつくう…んツ!?

もうツ、■■■のくせになんてモノ持ってるのよお…んああ♥

(気持ち良いツ…もう腰動かすのやめたくないの♥  
このまま、イツちやいたい…!!)

「す、凄いよお…マレデイの膣内!

締め付けがまた…!! うわああ!? こ、これって…!!?

「やツ、ああツ!? 私、もう…ツ♥

あ、貴方ので…:はあん♥いくツ! もう、イツちや…♥

「な…っ、なら僕も……!!  
あつ、でも最後に…最後だから、教えてくださ…っ!!  
ミカレデイの本名お…!!」

「ダメよ、それはツ…あん♥ちょ…貴方も動いて…いやあ!?  
んツ…ああツ♥はツ…はあ…ゆ、優よ…ツ!  
下の名前だけでいいでしょ…!? あツ…はあん♥」

「優っ…優さん…!! イツて!!  
僕も射精します…!! で、射精る…子宮で受け止めて…!!」

(あッ!? 射精されちゃう…膈内に…ツ♥  
■ 学生の男の子に膈内射精されちゃう♥)

「イクツ…イクわ!! 私ツイクう…イツちゃあ…あッ!?  
ああッ♥ イツ…ヤツ♥ んはああああッ♥」

「いっ…イキマ○コにい…!!  
うはあ!? だ、射精してるっ…おはああ!?  
子宮につ、搾り取られるうう!?!」

(射精てる…ツ。お湯みたいに熱い精液が  
私の膈内を…子宮の中を満たしてく♥  
ああ、なんて長い射精…♥  
■ のくせにそんなに私を妊娠させたいの…?)

「んはああ…ま、まだ射精るよお…優さあん♥  
お腹の中身が空っぽになっちゃいそう…」

僕にまたがった優さんが……

エロレディがうっとりした幸せそうな表情を浮かべてる。  
僕が……あのエロレディをセックスで  
満足させてあげられたんだ……!!

初めて感じる、男としてこれ以上ない喜び。

僕のモノは長い射精が終わったばかりなのに  
再び硬さを取り戻し始めていた。

「ゆ……優さあん……♡」

もう一回、しましょ

その瞬間、僕の意識はぶつりと……断ち切れた……。



























































